

B-IX-2

重度麻痺症例に対する浮力を用いた重力軽減療法の試み

木沢記念病院 中部療護センター

○浅野 愛子, 和田 哲也, 岩井 香織, 槇林 優, 奥村 歩, 篠田 淳

【はじめに】交通事故により重度の遷延性意識障害を呈し、その後大きく回復したものの、左上肢のみに重度麻痺が残存した脳外傷患者に対し、水治療法を応用した促通反復療法を実施したところ、筋収縮が改善し随意性の向上を認めたので報告する。

【症例・現病歴】男性、23 歳、交通事故にて受傷。受傷日に開頭血腫除去術・外減圧術施行、19 日後に気管切開術施行。受傷7ヶ月後にリハビリ目的で当センター入所。入所1ヵ月後 V-P シヤント施行。入所4ヵ月後に OT 開始となる。

【訓練経過】OT 開始時：錐体路トラクトグラフィーでは両側の錐体路が残存していると示唆されたが、左上肢に重度弛緩性麻痺を認め、随意運動は認められなかった。OT 開始4ヵ月後：左肩甲帯と前腕、手指に若干随意性が出現。OT 開始9ヵ月後：身体機能、ADL に大きな回復が見られたものの、左上肢の重度麻痺は残存。機能改善に著変はなく、わずかに左上腕二頭筋の随意収縮は認めるものの左肘関節の随意運動は全く認められなかった。そこで水治療法器具（イジェクターバス：HK-122、OG 技研）にて湯に左上肢を浸け、浮力を使用し、療法士の介助下での促通反復療法にて肘伸展・屈曲の運動学習を促したところ、肘関節の随意運動に改善を認めた。

【考察】麻痺を回復するには、目的の随意運動をいかに誘発させるかにかかっている。浮力を利用することで微小な筋出力で上肢の運動を可能とし、療法士が正しい力の方向性を介助することで正しい運動パターンを実現させやすい環境設定が可能になると考えられた。水（浮力）を使った重力軽減療法は、重度麻痺症例にとって有用な可能性が示唆された。